

# ドメスティック・バイオレンスが子供の心的世界に及ぼす影響について

—主にその外傷的指標—

妙木浩之（東京国際大学）、鈴木仁史（こうめまクリニック）、  
松永義博（埼玉県婦人相談センター）、増川敦子（埼玉県婦人相談センター）  
小菅さおり（埼玉県南児童相談所）、飯島典子（東京国際大学）、鹿沼愛（東京国際大学）

## <要旨>

本研究は、DV被害家庭における子どもが、DV体験によってどのような心理学的な影響を受けるかについての基礎的な研究である。研究では行動特性、および内的力動の二つの側面から、DV家庭の子どもを対象にして、DVが与える心理的影響について基礎的な指標を抜き出し、それらを考察した。具体的には、子どもが抱える傷つき、ストレスの高さを行動上の特徴から抜き出し、自己イメージの歪み、情緒的統制の困難さ、家庭内の対人関係など投影法を用いた精神力動的特徴を考慮に入れた、内的な世界をできる限り描き出すことにした。結果として、児童の心理的特徴は「父親からのDVによって生じた家族状況を否認して退行、内向化し、結果として性的な対人的な混乱を生じ、対人関係に対して萎縮し、内向化し、過度に防衛的になっている」ということができる。論文では、その一例を実際に事例として提示した。また今回の研究調査のシステムの導入によって、DVシェルターにおいて、早期に児童の心理学的な査定を行い、それを担当者それぞれにフィードバックすることの意義が検討されるようになっている。

## <キーワード>

DV被害児童、DVシェルター、子どもの内的世界、トラウマ、行動特性、力動的特徴

### 【はじめに】

夫や恋人、同居・配偶者のパートナーから受ける暴力、すなわちドメスティック・バイオレンス（Domestic Violence；以下DVと略記）による被害は配偶者だけでなく、その家庭に同居している子どもの精神健康面にまで影響を及ぼすことについて、DV関係の研究を中心に見直されて、公立一時保護所における調査（金・柳田ほか、2005；石井、2005）や母子生活自立支援施設に入所中の母子に対する調査（奥山、2005）によって、その実態が明らかになってきている。またつねに見直されているDV防止法の改正によって、接近禁止命令の対象範囲が被害者だけでなく、子どもにまで拡張され、児童虐待防止法の改定では両親間のDV目撃も虐待の一つとして記載されるようになった。つまり法のレベルでDV被害が子どもの心のトラウマにまで影響するという事態を考慮するようになってきている。それらは実態および顕在化した障害や行動上の問題についての調査であり、DV

に関する研究や調査はDV被害者や加害者に関するものが多く、子どもの内面についての心理学的研究ではない。Banchroft（2004）が述べているように、DVにさらされる子どもには、情緒・行動・発達面の多岐に渡る影響があるとされているので、当然のことながら、DV家庭の子どもたちは心理的な影響を受け、トラウマやストレスを抱えていることが推測される。そのため子どもの心にどのような影響を及ぼすかについての内面的世界についての研究はこれからの課題である。本研究では、DV家庭の子どもを対象にDVが与える心理的影響について基礎的な指標を抜き出し、それらを考察したい。具体的には、子どもが抱える傷つき、ストレスの高さを行動上の特徴から、自己イメージの歪み、情緒的統制の困難さ、家庭内の対人関係など投影法を用いた精神力動的特徴を考慮に入れた、内的な世界をできる限り描き出すことを目的にする。

## 【方法】

S 県内の公立一時保護所（DV シェルター）において入所中の児童を対象として、

1) 親からの聞き取りを中心とした調査研究によって子どもの行動特性を査定するために、精神科医による母子面接から、家族構成や DV 避難時に生じたストレス反応、あるいは精神医学的問題の聴取を行い、臨床心理士からの調査票を中心とした半構造化面接を行う。すなわち

- ① 家族構成などを前提に児童の精神状態に関する精神医学的面接による聴取
- ② 子どもストレス反応調査改訂簡略版 (K.E.Fletcher)
- ③ 子どものDV体験についての問診票 (作成)

の三点、さらにそうした外的、診断的な情報だけでは、子どもの内的な側面について調査できないので、以下の方法を導入した。

2) 臨床心理士による児童を対象としたプレイ技法を中心とした行動観察と描画を用いた投影法テストを実施する。つまり

- ④ 行動観察およびスモールトイ技法 (M. Klein) による子どもの表出
- ⑤ バウムテスト (C.Koch)
- ⑥ 人物画 (E.M.Koppitz)
- ⑦ 動的家族画 (Burnsetal.)

の四点が選択された。前者は親からの情報収集で、①②③は記入式質問票によるインタビュー調査で親中心に聴取し、後者④から⑦は児童とラポールを取りながら、投影による象徴的交流を分析するもので、力動的に⑤は無意識的、内的自己像を、⑥は無意識的な対象関係、対人関係を、⑦は家族像を表し投影されると考えられる。④はそれらを総括して、力動的な布置を明確にするために用いられている。

なお今回の研究は、協力、同意してくれる母親たちに限ったことであるが、母親たちとても重要なものであるため、それぞれの面接結果は母親にフィードバックし、子どもの発達状況および精神状態への注意点を指摘することに

し、調査した情報をもとに報告書を作成して、退所後の地域での DV を受けた母親とその子どもへの支援体制の情報提供をし、適切な援助を受けられるよう助言している。

## 【結果と考察】

これまでに調査対象となった 21 母子組は、家庭の児童数平均 2.9 人であるが、当初、対象とした児童は精神医学的面接において中等度以上のストレス状況にある母子と判断され、臨床心理士による面接を勧めて同意を得られた児童である（今回の報告する結果は、あくまで暫定的なものであり、現在も分析のための件数を進めるプロセスの途中にあるが、分類した傾向はかなりはっきりとしており、しかも数名の評定者の目を通しており、信頼性のある程度確保されているが、今後、継続中の調査によって、修正・変更を受ける可能性がある）。そのため②のストレス反応調査においては、ほぼ全家庭がなんらかのストレス反応が報告されている。③から分かることとして、柳田（2003）も指摘しているように、20 母子組とほぼ全家庭で、母親の暴力被害の場面を目撃している。

ただ今回の調査で判ったことだが、うち 7 人（約 30%）の児童が DV 避難の意味を理解していないということ、そのうち 4 人（約 60%）の児童が「父親が好き」だと答えていることである。こうした認識は児童のシェルター避難の理解を難しくするだけではなく、投影法の結果とつき合わせてみると、父母、夫婦関係の理解にも影響を及ぼしているように見える。

児童に関する調査において、④において 7 人（約 33%）の児童がトラウマティックな主題のプレイを、そこで展開していることが特徴的で、DV 体験が少なからず心的外傷として体験されているという、多くの論者の主張を裏付ける (Bancroft & Silverman, 2002)。

ちなみに⑤から⑦の投影法について、今回分析の対象としたのは 10 人の児童、特に 6 歳以上に限定した。理由は第一に、投影法の象徴表現が十分に可能なだけ表象が分化している年齢であるために象徴的分析対象としやすいこと、

第二に6歳以上の子どもは年少の子どもと比べて、比較的DVを長期間にわたって理解しながら体験している可能性が高いことである。もちろん本研究の分析は、指標を抜き出しその内的世界を描写する仮説の構築の後に、6歳以下の子どもの理解に適用されることが望まれる（研究班では現在、3歳から6歳の間の児童に関して健常統制群との比較対照研究が継続中である。鹿沼、2009年予定）。以下10人の投影法の特徴を列挙しよう。

結果⑤ バウムテスト：

- 幹に比して樹冠部分が縮小している。
- 木が二本描かれる。
- 木が左隅よりに描かれる。
- 枝が2分枝している。

結果⑥ 人物画：

- 服飾が多い。
- 手足部分が誇張や縮小が起きている。
- 地面から浮いている。

結果⑦ 家族画：

- 父親不在。
- 料理、食卓場面が多い。
- 室内が多い。

これらは彼らの内的世界を理解する指標となるが、バウムテストにおいては、不安指標と歪み指標の中間に位置するような項目が、人物画においては、防衛的で対人交流において不安定であるという特徴が、家族画においては父親の暴力を否認して、引きこもる傾向が描き出されている。それぞれ詳細に分析するなら、⑤の特徴は、DV被害母子組の児童が対社会的な対人交流において心理的に萎縮していること、性や家族イメージの分裂、心理的に内向化していること、自分自身の性や家族の同一性がやや一貫性を失っていることを意味している。⑥は対人交流に対して過度に防衛的になっていること、対人関係における萎縮しやすくなっていること、自分の心的居場所が不安定であることを意味している。また⑦は現状の避難状況における父親否認、母子共生的な（口唇期的）関係への退行、内向化といったことを意味している。

これらそれぞれの投影法の結果と④のプレイ技法において、トラウマティックなプレイの率が高いこととあわせて考えれば、DV被害家庭の児童の心理的特徴は「父親からのDVによって生じた家族状況を否認して退行、内向化し、結果として性的な対人的な混乱を生じ、対人関係に対して萎縮し、内向化し、過度に防衛的になっていること」ということができる。

#### 【事例】

実際に行われている研究は、DVシェルターにおける母子の今後の生活のためのメンタルヘルスのための参考資料、および本人へのフィードバックのためにも使われている。そのためここで事例を示すことで、そのプロセスを提示して、この調査研究方法が実際の臨床活動に組み込む可能性を論じることしよう。

#### 【事例R 8歳 女子】

家族について述べよう。

父親(29)：元組員、工員をしている。青少年時代に少年院に入所経験あり。パチンコをやめられず、しばしば借金をしてきた。仕事場などでストレスを感じると家に帰ってイライラしている。

母親(28)：中学校時代に夫と付き合っている。別れ話をすると切れられるので怖くて強くいえないでいた。

弟(4)：暴力を振るわれるようになって、父親を怖がっている。

経緯：母親は保険その他の仕事で働きながら、家計を支えてきたが、夫がもっと責任をもってもらいたいと仕事をやめて、以後、暴力がひどくなったので、警察を経てシェルターに入所している(三回目)。

精神科医によるインタビューの結果、分かったことは以下のとおりである。母親は健康で、夫の社会復帰を何度も願って、最終的に暴力を受けるようになっていく。精神医学的に夫は人格障害のレベルが予想され、回復は難しい。しかも身体的性的な暴力が過度で、子どももそれに怯えるようになっていく。またトラウマ反応のようなものが観察されたので、今回の調査

を母親に求め、母親の同意の元に、子どものトラウマについての調査が行われた。従来はここまでの調査であったが、今回の調査にあたって、子どもへの面接と検査とが行われるようになった。

ストレス調査票によると、平均は1.96ポイントで低～中程度のストレス反応。高得点は「何かの拍子に強く脅えることがある（4：しばしば）」「大人にまとりつくことがある（4：しばしば）」「感情表現（4：とても抑えている（家にいた時は））」「警戒心が強かったり、用心深い素振りを見せる（4：しばしば）」「特定の出来事がまた起こるのではないかと怖がる態度がある（4：しばしば（家にいた時は））」「怖い夢をみる（3：ときどき）」「一人ぼっちでさびしいといった様子がみられる（3：ときどき）」など。問診の自由記述に、常に父親の気分や両親間の雲行きを伺って行動する様子が報告されていることから、日常的に不安や警戒心が強く神経過敏になっていること、また自分の感情や欲求に抑制が起きていることが推察される。

父親について、問診では「父親のことが好き：ややそう思う」「両親の仲が悪いと思っているか：どちらかというと思わない」とされているが、面接中の描画では父親は描かれず、言及もなかった。仲が良い時の両親も見知っているが、パチンコ依存や母親への暴力など父親の否定的な側面が家族にとって深刻な問題であることを理解していると考えられる。

行動観察のための最初の導入では母親との分離はスムーズで、初対面の検査者にも臆することなく対応し、適応のよさが見られた。検査中は終始元気で明るく、検査者の目をみてしっかり話す。描画への取り組みも意欲的で集中力が高く、与えられた課題をこなす自信が感じられた。ただ適応のパターンは迎合的で、検査の描画の他に好きな図柄の絵をつぎつぎに描いて見せ、自分のペースで時間のほとんどを得意な描画に費やした。緊張する検査場面において、自分で場をコントロールすることで不安を防衛していると思われた。また自分の得意なことをしてみせることが主要な対人様式となっており、

対人交流のパターンが限定的で硬直気味の印象がある。

ちなみに後述の描画は巧みだが全体に図式的で、思いつくままの自由な表現や逸脱を好まない心象が伺え、情緒的な抑制が強い。また、発話は活発だが一方的な説明ややりたいことの表明などが多く、会話の相互性を楽しむ余裕はやや乏しい。ただし検査の終盤には検査者に描いているものを当てさせるなどの遊びがみられ、描画の内容も比較的自由的なものになったことから、緊張が解けた状況ではより柔軟な感情表現や対人交流ができる可能性が感じられた。検査者と1対1の時は明るく活動的である一方、自分が話していない時や、母と弟のやりとりを見ている時などのRの表情は硬く暗い印象があり、検査中の態度が適応努力による外向きの姿であることが感じられる。

「好きな絵を描いて」の指示に対してまず女の子が描かれた。顔、胴、スカート、両手、両足、髪（長髪部分）の順で、最後にオレンジ色の風船が描かれた。女の子はセンターにいる同学年で仲良しの「Yちゃん」であり「遊ぶことを考えている」と説明された。

女の子の表情は楽しげで夢や願望を表す風船が添えられ、自分の理想の姿をYに投影したものと考えられる。また、現在の不安な生活の中で、いろいろな話ができるYの存在がRにとって大きな心の拠り所になっていることが伺える。描画位置は左端上部で、本来は内向的・内省的でありながら、外見は過剰適応気味に外向性を発揮していることが表われている。つまり、外面と内面とにやや開きがあり、描き終えてすぐに朝顔やアンパンマンで紙面右の空白を埋める作業がされたことは、Rが外向的な対人様式で適応を図っていることと呼応している。

朝顔は水色の鉢（Yの名前を書字）、緑の茎と葉、紫の花、青い茎と青い花、土、水（土の上に黄色で薄く重ね塗り）の順に描かれた。図式的で女の子の絵と同様、描き慣れた絵と思われる。土と花は成長希求やエネルギーの表現と考えられるが、自身ではなく友だちのYが育てているものとして説明され、Yへの心理的な依存

と、自分の欲求を直接表現することを回避・抑制する傾向が感じられる。2本の朝顔は赤と青で、母に育まれる自分と弟、あるいは両親を含む自分の中の男・女イメージを描いたとみられる。Yちゃんが好きな色はピンクとオレンジなのに対し、R自身が好きな色は水色と答え、本来は女性的なものに憧れながらそれを表明することに抵抗があり、無難な色を自分にあてがっている印象を受けた。

アンパンマンとドラえもんも正確な円に目鼻を描き入れた図式的な描画で、ここでもパターン化された過剰適応傾向の一端が表れていると思われる。

バウムテストを行った(図1)。左下に描画。幹の線(こげ茶)を上から下へ2本描き、樹冠(黄緑)、りんごの実4つ、最後に幹の内部を茶色で彩色して完成とした。描画はスピーディで色塗りなども多少のはみ出しは気にしない大雑把さがある。これはりんごの木、年齢は5才で、季節は春。4つのりんごのうち大きめの2つが男、残りの2つが女、木の幹が男、樹冠は女と説明された。

全体：紙の左下に描かれたことは、外見上の外向性や積極性とは異なり、本来の性格が内向的・内省的であることを示している。完成直後に紙面右の空白を埋めるように「一本の木」と大書きしたのは①と同じパターンで、模範的な好ましさや能力の高さを相手にアピールする形で外向性を発揮し、現実適応をはかっていると考えられる。木の姿そのものは安定感が感じられるが、樹冠が小さく枝がない樹形や画面の下辺を基部としている点など、8歳としては幼い印象がある。

幹：幹は太く堂々としており、画面の下辺を基部としているが、しっかり立っていて、内的エネルギーや性格の強さ、安定感や現実感がある。幹の両側の線はほぼ平行だが若干ふくらみがあり、見せかけのよさやがんこさとともに、感情の抑圧やうっ積をみることができる。枝が描かれなかったことは、情緒や対人関係の未成熟さを示していると考えられる。

樹冠と実：上部が少しつぶれた小さめの樹冠

は、他者との関わりや環境に対する柔軟性、情緒的な自己表現の力などが未発達で多様に乏しく、限定された表現パターンしか持っていないことを示していると思われる。樹冠の内部に描かれたりんごは対照的に大きめで、成功・成果への希求や、自分の能力を表示したい気持ちの強さを表している。

4つの実(男女2つずつ)はRの家族構成でもあり、男女の違いは大ききで説明された。また、幹は男、樹冠は女と、部分ごとに性別を答えたことから、Rの中で男性イメージ・女性イメージが形成される途上であって、男性優位のイメージがあること、Rが女性としての統合された自己像をまだ持ち得ていないことを示唆している。また木は5才であることは、それが弟出生直後のRの年齢であることを考えると、男性である弟の出生が外傷的であった可能性や同胞葛藤が表現されていると思われる。一方で、木が「早く皆に美味しいといってもらいたいと思っている」ことは、女性が不利な性であることを感じながらも母親との同一化がされ、早く大人の女性になりたい気持ちがあり、女性としての自己イメージができてきたことが推察される。

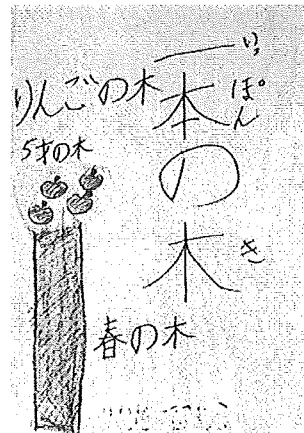


図1 バウムテスト

動的家族画を行った(図2)。左から弟、母親、自分(R)の順に描かれた。父親は「今一緒に住んでいないから」として描かれず、明確な拒否の姿勢が示された。人物の描写はいずれも顔、吹き出し、胴、ズボンまたはスカート、両手、両足の順で、母親と自己像は最後に髪の毛の長髪部分が付加された。全体に紙の左下に寄せて配置

がされ、バウムテストと同様、内向的な性向が感じられる。①②と同じく空白を埋める作業がされ、上部には空、紙面右には家が付加されて全体にバランスの取れた構図にまとめた。

弟は何をして遊ぶか困っているところ、母はそれをRに聞いているところ、Rはそれに「うーん、わかんない」と答えていると説明され、人物の頭上に矢印が付加された。人物像は①の女の子と同じ図式で動きがなく、それぞれの動作は吹き出しのせりふで表現されたことから、人物の不定形なポーズや様子を描くことは苦手であり、代わりに言語表現で知的に処理したと思われる。

3人の描かれた順番から、母親をめぐっての弟の存在の大きさが感じられる。また、3人が同じテーマで相談している様子は暴力的な父親に対処してきた母子の連帯感を感じさせる。一方、弟が発した問題を母がひきとってRに投げる構図は、母が弟の意志や気分を重視し、Rに対しては依存的であること、結果的にRが困惑するという三者関係を示唆しており、弟を庇護の対象とした家庭のなかで、Rが過剰適応せざるを得ない状況が表されていると思われる。3人の中で母親だけが笑っており、Rにとって母親は、状況に対して少し鈍感で自分や弟のことをわかってくれない人と映っているかもしれない。

母親とRはほぼ同じ表現で大きさもあまり変わらず、母親との同一化が明確である。どちらにもスカートに模様が描かれ、女性性を強く意識していることが伺われる。描かれた人物像に首や襟の線がないことは、心の中で、身体的な衝動が堰き止められていることを示している。母親とRの肩の線が左右アンバランスなことからは、責任や重荷を負うことに対し、それをやりとげる能力があるという思いと、自信のなさとの両価的な感情が伺われる。また、Rの困った表情は①の楽しそうな女の子の姿とのギャップが大きい。

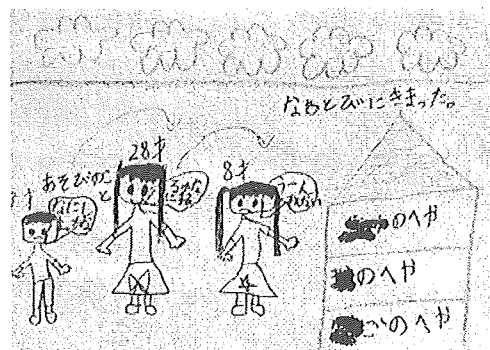


図2 動的家族画

空と雲は世界全体に対する強い不安を表しており、先が見えない母子3人の不安定な状況を示していると考えられる。付加された家は3人のよりどころとなるものの表現と思われるが、窓やドアがなく外界に対して閉じた家で、温かみも乏しい。また「3人で相談して決めた」部屋割りはそれぞれ境界線で独立しており、3者間の情緒的な交流が不十分であること、3人中でRが孤独感や疎外感を抱いていることが推察される。家に父親の部屋はない。Rの部屋が3階であるのは、一番安全な場所であることと、独立を求める心の表れであろう。

二つの課題が終わると、彼女は、自由描画をプレイの中ではじめた。そこには二つの山が描かれている。左に深緑で細長い山、続いて右に水色でほぼ同型ながら山頂が平らな富士山を描いた。左の山は「やまぶき山」と命名し、18歳、中学生の男、富士山は20歳、大人の女であると説明した。男・女イメージを形成する途上にあってそれぞれをパターン化して描いたと思われる、この年齢群では逸脱ではない。男の山が左に描かれたことは、バウムテストで木の幹を男性としたことと合わせ、Rの中で男性優位のイメージがあること、それらのイメージを統合して肯定的な女性としての自己像を形成する過渡期にあることなどが考えられる。

その後の自由な描画では「バーベキュー」を描いた。水色とオレンジの2枚のシート、中央にバーベキュー台と肉を描いて、「3人だから肉も3つ」と説明し、父親の参加は拒否された。2枚のシートのどちらにRが座るのかとの検査者の間に対し、右のシートにRと母親が座ると言いかけて、右に3人(Rと母親と弟)が座り、

左のシートは「着替え用」と言い直し、これも父親に言及することを避ける工夫と思われる。右のシートに3人の皿（弟の皿が緑）、空の線と太陽、下に川を付加して完成とした。シートが川に流されそうな構図で、3人になってしまった現在の家族の流動的で不安な現状が表現されているようである。他の絵と同じく、シートや皿など、男女で寒色と暖色を使い分ける表現がされ、性別イメージの形成過程であることが感じられた。

③の家族画よりも自然で楽しい家族の風景がRの心に浮かんだと想像されるが、図式的でない人物像を描けないことや、父親にまつわる問題を拒否する気持ちなどのために、無人のバーベキュー風景となったと思われる。

こうした情報からこの事例Rは次のように考察できる。「本来の性格は内向・内省的で、心的エネルギーが強くしっかりしている。家庭内では、弟の庇護の役割を母親と共にこなすことが多く、外界に対しては過剰適応気味で、対人行動上は積極性や外向性を発揮する。しかしそのあり方は自分にできることをアピールすることなどにパターン化されており、相手の反応を受け止めて反応する相互交流的なコミュニケーションは限定的である。その背景には大人に対する警戒心や不安の強さがあると思われ、常に両親の様子に怯える生活環境が大きく影響しているであろう。

性的な関心が高まるとともに母親との同一化が進んでいるが、自己の女性性や性別イメージの形成はまだ途上であり、統合されていない。その一因として、暴力と親密さが混在する両親の関係を理解しきれないこと、男性である弟が母親から大事にされることなどが推測される。

描画は得意だが総じてキャラクター的・図式的で情緒的な表現に乏しく、自己表現することに対する不安や恐れが感じられる。それには日常的に両親の顔色を伺って自分の欲求や感情を抑える防衛スタイルをとってきたことが影響しているだろう。情緒表現を補償するものとして、言語的、図式的な表現による知性化を多用している。また、図式的な描画や折り紙などに没頭

し技能を高めることが、内的な不安や衝動をコントロールしたり昇華したりすることに役立っていると思われる。

母親が思う以上に、Rは父親の暴力などの否定的な側面と、それが自分達家族に及ぼす影響をよく理解しているように感じられる。母親にケアされる弟に同胞葛藤を抱きながら、母が自分を頼っていることも認識しており、難しい状況の中で自分を抑えて頑張っている。また、その頑張りや寂しさが母親や大人たちに充分理解されない不全感や、母子3人の中での孤立感を感じていると思われる。」

これらの情報を基にして、精神科医と担当の臨床心理士、そして母親が子どもの内的世界を共有することで、連絡を取り合っ、今後の母子のメンタルヘルスに役立てて行くことにした。数週間後、母子はシェルターから自立支援施設に移って行った。

#### 【おわりに】

今回の研究は基礎的なもので、その導入は研究目的であったが、このシステムの導入そのものが、DVシェルターにおける母子のメンタルヘルスにとって、重要な臨床的意義のあるものであることが発見されつつある。図式化すると図3のようになるだろう。

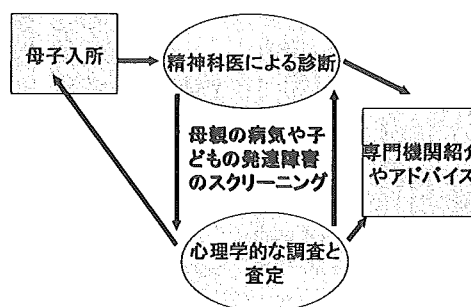


図3 DVシェルターにおける介入

DV体験が子どもに与える影響についての基礎研究から分かってきたことは、それが深刻なものであるということであり、今後、この研究

をより充実させて行く必要があるものの、より積極的な子ども援助のためのシステムの導入が求められている。

#### 文献

Bancroft,L. &Silverman,J.G. (2002)『DVにさらされる子どもたち:加害者としての親が家族機能に及ぼす影響』幾島幸子(訳) 2005年 金剛出版

江幡綾子・吉田昭久 2000 子どもの絵に見られる家庭内コミュニケーションの実態と心理的課題:動的家族画テスト(KPD)を通して一茨城大学教育学部紀要(人文・社会科学,芸術), 49, 95-115

井関知美・上林靖子ほか 2001Child Behavior Checklist/4-18 日本語版の開発 小児の

精神と神経 41 (4), 243-252.

石井朝子 2005 DV被害母子に対する援助介入に関する研究 平成16年度厚生労働科学研究 子ども家庭総合研究事業報告書(主任研究者 石井朝子)

鹿沼愛 2009 修士論文 東京国際大学大学院臨床心理学研究科

金吉晴・柳田多美ほか 2005 DV被害を受けた女性とその児童の精神健康調査 厚生労働科学研究費補助金 子どもと家庭に関する総合研究事業 総括・分担研究報告書(主任研究者 金吉晴)

奥山真紀子 2005 被害児童への治療・ケアのあり方に関する研究 平成16年度厚生労働科学研究 子ども家庭総合研究事業報告書(主任研究者 石井朝子)